1. くり返えされる爆破事件
2. 都市過密化と都市政策
3. 公害の日々・瑞穂の国
4. 土木新刊ラッシュ

マンスリートピックス

1. 6月16日横須賀線の電車内で爆破事件が起こり，死者1名と多数の負傷者が出た。昨年の同じころにも関西の山陽電鉄で起こっている。似たような事件をかえりみれば42年の東京駅「みどりの窓口爆破事件」や37年ごろの「草加次郎事件」などがあるが，これらはいずれも未解決のままである。多くの人々が利用する公共機関にこうした仕掛けをする人間の心理は理解できないが，それに使用された爆薬は一体どのようにして犯人の手に入ったものなのだろうか。土木関係でも従来大量の爆薬を用いていろんな工事を実施しているが，使用をあやまれば危険きわまりないこの爆薬の保管管理は，十分になされているであろうか。今一度検討してみる必要があると思う。通勤者が朝夕のラッシュの中でふと網棚を見上げ不安におそわれることがないよう1日も早く未解決事件の犯人が捕えられ，悲しい惨劇を企てる人間がいなくなることを切に祈るところである。 [J]

2. 都市への人口，産業の過度集中は経済発展の大きな原動力となった。反面この過度集中は都市に過密化を促進させ，地価の高騰，上下水道の不足，交通の渋滞，大気汚染，水質汚濁などの公害を誘発する原因となった。

一方都心部の過密化は住民をして，生活の環境悪化を招き，スプロール化現象として都市周辺部に無計画に拡がっていった。さらにそこで待ちかまえていたものは，学校，保健所，衛生施設などの不足であり，市町村の側からとらえるならば，一地方公共団体の財政力ではとうていまかなえない行政需要の激増が発生した。この現象は過疎過密問題として社会問題を呼び起こし，最近自民党をはじめとする各政党が，都市問題につき相ついで“都市政策案”を発表したことは，参院選挙の思わくもあるやもしれないが，都市問題がいかに深刻になってきたか如実に示すものであろう。

この機会に，われわれ土木技術者も土木工学的センスからだけでなく，巨視的立場から各党の“都市政策案”を批判し，都市問題についても認識をさらに深めてほしいものである。 [S]

3. 「新聞に公害の日々瑞穂の国」といってもよいくらい公害問題が新聞を賑わしているが，全く象徴的な記事が2件，同じ日の朝刊と夕刊に続けて載った。一方は，それほど有名をはせてはいない山口県周南地区工業整備特別地域での話。新設工場よりときおり急襲する有毒ガスのため，昔から住んでいた住民が，戦時下の空襲さながら，「山へ逃げろっ」の声とともに狭い路地をぶつかりながら突走るというもの。他方は，お隣りの広島県で，古くからある化学工場の排気ガスのため，その付近に家を建てた人々が被害を受け，この被害防止対策の実施は企業として不可能なゆえに会社の閉鎖を決定したというニュース。公害，災害，水不足，さらに過密に過疎など，その遠因をすべて環境変化に求めてもよいであろう。瑞穂の国から煙突の国へと急激な変革を遂げつつあるとき，状況の変化は必ず被害者を生む。被害を僅少に留めようとすれば，まず整備こそ肝要であるといって，簡単にすますわけにはいかない。末端の日常生活に現われる種々相に眼をやって，被害を事前に予防しなければならないところに困難がある。本年度からあらためて新全国開発計画の策定が伝えられるが，その効果のみならず，被害の予測とその予防対策についても，十分な調査と討議が行なわれ，すぐれた見識のある施策の行なわれることを望んで止まない。[C]

4. 学会誌に書評欄が正式に誕生してから，はやくも3年と6ヵ月たった。この間に本書評欄で紹介された新刊書は330件におよび，月平均に直すと8冊弱の土木図書出版ラッシュを招来している。この数字の中には，再版，改訂版，学会出版物などが含まれていないので，実数はもっと大きなものであるのかも知れない。書評欄誕生直後の平均定価と今時点での平均定価を比較すると，約3割ほど上昇していることも悲しいが，つぎからつぎへと生まれてくる新刊書が，もって生れた使命を十分に読者に伝え得たか，また買っていただくべき人々の手許まで歩みゆくことができたか心配である。あわただしい世相の中にあって，図書の配送ルートの前近代性は目を覆いたいくらいルーズであり，地方の人々は新刊書，特に専門書の背をみることすら不可能な日々かと考える。技術の進歩に道を相共にする書籍の販売ルートのあるべき姿を，需要者側である技術者の側からも注文を大いに出されてもよい時点にきているのではなかろうかと考えるがいかがだろうか。 [E]